

131. 乳癌患者の骨シンチグラフィー —その成績と読影上の問題点について—

京都大学 放射線科

山本 逸雄	福永 仁夫	土光 茂治
小野山靖人	島塚 莞爾	藪本 栄三
放射線部		
藤田 透	森田 陸司	

愛媛大学 放射線科

浜本 研

第14回日本核医学会において、我々は、転移性腫瘍における^{99m}Tc-リン化合物による骨シンチグラフィーの有用性について報告し、乳癌患者において骨転移が高頻度におこることを指摘した。今回、症例を増やし、206例の乳癌患者における骨シンチグラフィーの成績、及び、その読影上の問題点について検討を行ったので報告する。我々は、乳癌患者においては、ほぼルーチンに全身骨スキャニングを行い、3~6ヶ月ごとに経時的に観察している。

乳癌患者の骨シンチグラム読影上の問題点としては

- ①乳房の腫瘍そのものへの集積
- ②広範囲切除術を受けた例での胸壁の集積及び、肩関節部の集積の増加

③手術例における胸鎖関節部の集積の左右差

④手術例における肋骨々折による集積

⑤⁶⁰Co 照射の影響

等があり、その鑑別についての検討を述べる。

骨シンチグラムの成績は、Stage、組織、腫瘍の部位等との相關の検討を行った。206例の施行例中44例(21%)が骨シンチ陽性であり、転移と判定された。そのうち術前あるいは術後3ヶ月以内に転移を発見された例は10例あり、これ等のうちStage分類が変更されるべきものが9例あり、Stage分類に関して術前骨シンチグラフィーが有用であることを強調したい。

132. 原発性肺癌患者における全身骨シンチグラム

国立がんセンター

放射線診断部

田部井敏夫 小山田日吉丸

放射線研究所

外科

折井 弘武

米山 武志

我々は昭和48年秋より^{99m}Tc-磷酸化合物を使用して全身骨シンチグラム(以下骨シンチ)を施行し、悪性腫瘍の早期骨転移の発見に努めている。今回は原発性肺癌患者・85例について検討した結果を報告する。治療前の患者(A群)は25例で、残り60例が治療後(B群)であった。

1. Stage分類との関係

A群についてはStage I : 1/11, Stage II : 1/1, Stage III : 11/13が陽性であった。B群の治療開始前のStageとシンチ施行時の陽性頻度は、Stage I : 16/19, Stage II : 4/6, Stage III : 24/35であった。この場合治療開始時点からシンチ時までの期間が問題だがこれについて検討の上報告する。

2. 組織型との関係

A群では腺癌 : 7/17, 扁平上皮癌 : 2/4, 未分化癌 : 4/4に陽性の結果を得た。B群では腺癌 : 31/39, 扁平上皮癌 : 8/11, 未分化癌, 5/10, であった。

3. 血中アルカリホスファターゼ(Al-p)との関係 (正常値2.9u以下)

A群でシンチ上陽性13例中Al-pが2.9以上が5例でB群では44例中26例が高値を示した。

4. 骨転移の好発部位

転移の好発部位としては、A・B群ともに肋骨・胸椎・腰椎・骨盤・大腿骨に多くみられ、珍しい例では末梢骨(楔状骨・手根骨)の3例がみられた。